国貞えがく

泉鏡花

青空文庫

一

柳を植えた……その柳の一処繁った中に、清水の湧く井戸がある。……大通り四ツ角の郵便局で、東京から組んで寄越した若干金の為替を請取って、三ツ巻に包んで、卜先ず懐中に及ぶ。

春は過ぎても、初夏の日の長い、五月中旬、午頃の郵便局は閑なもの。受附にもどの口にも他に立集う人は一人もなかった。が、為替は直ぐ手取早くは受取れなかった。

取扱いが如何にも気長で、

「金額は何ほどですか。差出人は誰でありますか。貴下が御当人なのですか。」

などと間伸のした、しかも際立って耳につく東京の調子で行る、……その本人は、受取口から見た処、二十四、五の青年で、羽織は着ずに、小倉の袴で、久留米らしい絣の袷、白い襯衣を手首で留めた、肥った腕の、肩の辺まで捲手で何とも以て忙しそうな、そのくせ、する事は薩張捗らぬ。態に似合わず悠然と落着済まして、聊か権高に見える処は、土地の士族の子孫らしい。で、その尻上がりの「ですか」を饒舌って、時々じろじろと下目に見越すのが、田舎漢だと侮るなと言う態度の、それが明かに窓から見透く。郵便局員貴下、御心安かれ、受取人の立田織次も、同国の平民である。

さて、局の石段を下りると、広々とした四辻に立った。

「さあ、何処へ行こう。」

何処へでも勝手に行くが可、また何処へも行かないでも可い。このまま、今度の帰省中転がってる従姉の家へ帰っても可いが、其処は今しがた出て来たばかり。すぐに取って返せば、忘れ物でもしたように思うであろう。……先祖代々の墓詣は昨日済ますし、久しぶりで見たかった公園もその帰りに廻る。約束の会は明日だし、好なものは晩に食べさせる、と従姉が言った。差当り何の用もない。何年にも幾日にも、こんな暢気な事は覚えぬ。おんぶするならしてくれ、で、些と他愛がないほど、のびのびとした心地。

気候は、と言うと、ほかほかが通り越した、これで赫と日が当ると、日中は早じりじりと来そうな頃が、近山曇りに薄りと雲が懸って、真綿を日光に干すような、ふっくりと軽い暖かさ。午頃の蔭もささぬ柳の葉に、ふわふわと柔い風が懸る。……その柳の下を、駈けて通る腕車も見えず、人通りはちらほらと、都で言えば朧夜を浮れ出したような状だけれども、この土地ではこれでも賑な町の分。城趾のあたり中空で鳶が鳴く、と丁ど今が春の鰯を焼く匂がする。

飯を食べに行っても可、ちょいと珈琲に菓子でも可、何処か茶店で茶を飲むでも可、別にそれにも及ばぬ。が、袷に羽織で身は軽し、駒下駄は新しし、為替は取ったし、ままよ、若干金か貸しても可い。

「いや、串戯は止して……」

そうだ！　小北の許へ行かねばならぬ——と思うと、のびのびした手足が、きりきりと緊って、身体が帽子まで堅くなった。

何故か四辺が視められる。

こう、小北と姓を言うと、学生で、故郷の旧友のようであるが、そうでない。これは平吉……平さんと言うが早解り。織次の亡き親父と同じ夥間の職人である。

此処からはもう近い。この柳の通筋を突当りに、真蒼な山がある。それへ向って二町ばかり、城の大手を右に見て、左へ折れた、

屋並の揃った町の中ほどに、きちんとして暮しているはず。

その男を訪ねるに仔細はないが、訪ねて行くのに、十年越の思出がある、……まあ、もう少し秘して置こう。

さあ、其処へ、となると、早や背後から追立てられるように、そわそわするのを、なりたけ自分で落着いて、悠々と歩行き出したが、取って三十という年紀の、渠の胸の騒ぎよう。さては今の時の暢気さは、この浪が立とうとする用意に、フイと静まった海らしい。

二

この通は、渠が生れた町とは大分間が離れているから、軒を並べた両側の家に、別に知己の顔も見えぬ。それでも何かにつけて思出す事はあった。通りの中ほどに、一軒料理屋を兼ねた旅店がある。其処へ東京から新任の県知事がお乗込とあるについて、向った玄関に段々の幕を打ち、水桶に真新しい柄杓を備えて、恭しく盛砂して、門から新筵を敷詰めてあるのを、向側の軒下に立って視めた事がある。通り懸りのお百姓は、この前を過ぎるのに、

「ああっ、」といって腰をのめらして行った。……御威勢のほどは、後年地方長官会議の節に上京なされると、電話第何番と言うのが見得の旅館へ宿って、葱の※で、東京の町へ出らるる御身分とは夢にも思われない。

また夢のようだけれども、今見れば麺麭屋になった、丁どその硝子窓のあるあたりへ、幕を絞って——暑くなると夜店の中へ、見世ものの小屋が掛った。猿芝居、大蛇、熊、盲目の墨塗——（この土俵は星の下に暗かったが）——西洋手品など一廓に、※草の花を咲かせた——表通りへ目に立って、蜘蛛男の見世物があった事を思出す。

額の出た、頭の大きい、鼻のしゃくんだ、黄色い顔が、その長さ、大人の二倍、やがて一尺、飯櫃形の天窓にチョン髷を載せた、身の丈というほどのものはない。頤から爪先の生えたのが、金ぴかの上下を着た処は、アイ来た、と手品師が箱の中から拇指で摘み出しそうな中親仁。これが看板で、小屋の正面に、鼠の嫁入に担ぎそうな小さな駕籠の中に、くたりとなって、ふんふんと鼻息を荒くするごとに、その出額に蚯蚓のような横筋を畝らせながら、きょろきょろと、込合う群集を視めて控える……口上言がその出番に、

「太夫いの、太夫いの。」と呼ぶと、駕籠の中で、しゃっきりと天窓を掉立て、

「唯今、それへ。」

とひねこびれた声を出し、頤をしゃくって衣紋を造る。その身動きに、鼬の香を芬とさせて、ひょこひょこと行く足取が蜘蛛の巣を渡るようで、大天窓の頸窪に、附木ほどな腰板が、ちょこなんと見えたのを憶起す。

それが舞台へ懸る途端に、ふわふわと幕を落す。その時木戸に立った多勢の方を見向いて、

「うふん。」といって、目を剥いて、脳天から振下ったような、紅い舌をぺろりと出したのを見て、織次は悚然として、雲の蒸す月の下を家へ遁帰った事がある。

人間ではあるまい。鳥か、獣か、それともやっぱり土蜘蛛の類かと、訪ねると、……その頃六十ばかりだった織次の祖母さんが、

「あれはの、二股坂の庄屋殿じゃ。」といった。

この二股坂と言うのは、山奥で、可怪い伝説が少くない。それを越すと隣国への近路ながら、人界との境を隔つ、自然のお関所のように土地の人は思うのである。

この辺からは、峰の松に遮られるから、その姿は見えぬ。最っと乾の位置で、町端の方へ退ると、近山の背後に海がありそうな雲を隔てて、山の形が歴然と見える。……

汽車が通じてから、はじめて帰ったので、停車場を出た所の、故郷は、と一目見ると、石を置いた屋根より、赤く塗った柱より、先ずその山を見て、暫時茫然としてゐんだのは、つい二、三日前の事であった。

腕車を雇って、さして行く従姉の町より、真先に、

「あの山は？」

「二股じゃ。」と車夫が答えた。——織次は、この国に育ったが、用のない町端まで、小児の時には行かなかったので、唯名に聞いた、五月晴の空も、暗い、その山。

三

その時は何んの心もなく、件の二股を仰いだが、此処に来て、昔の小屋の前を通ると、あの、蜘蛛大名が庄屋をすると、可怪しく胸に響くのであった。

まだ、その蜘蛛大名の一座に、胴の太い、脚の短い、芋虫が髪を結って、緋の腰布を捲いたような侏儒の婦が、三人ばかりいた。それが、見世ものの踊を済まして、寝しなに町の湯へ入る時は、風呂の縁へ両手を掛けて、横に両脚でドブンと浸る。そして湯の中でぶくぶくと泳ぐと聞いた。

そう言えば湯屋はまだある。けれども、以前見覚えた、両眼真黄色な絵具の光る、巨大な蜈※が、赤黒い雲の如く渦を巻いた真中に、俵藤太が、弓矢を挟んで身構えた暖簾が、ただ、男、女と上へ割って、柳湯、と白抜きのに懸替って、門の目印の柳と共に、枝垂れたようになって、折から森閑と風もない。

人通りも殆ど途絶えた。

が、何処ともなく、柳に暗い、湯屋の硝子戸の奥深く、ドブンドブンと、ふと湯の煽ったような響が聞える。……

立淀んだ織次の耳には、それが二股から遠く伝わる、ものの弘のように聞えた。織次の祖母は、見世物のその侏儒の婦を教えて、

「あの娘たちはの、蜘蛛庄屋にかどわかされて、その※になったいの。」

と昔語りに話して聞かせた所為であろう。ああ、薄曇りの空低く、見通しの町は浮上ったように見る目に浅いが、故郷の山は深い。

また山と言えば思出す、この町の賑かな店々の赫と明るい果を、縦筋に暗く劃った一条の路を隔てて、数百の燈火の織目から抜出したような薄茫乎として灰色の隈が暗夜に漾う、まばらな人立を前に控えて、大手前の土塀の隅に、足代板の高座に乗った、さいもん語りのデロレン坊主、但し長い頭髪を額に振分け、ごろごろと錫を鳴らしつつ、塩辛声して、

「……姫松どのはエー」と、大宅太郎光国の恋女房が、滝夜叉姫の山寨に捕えられて、小賊どもの手に松葉燻となる処——樹の枝へ釣上げられ、後手の肱を空に、反返る髪を倒に落して、ヒイヒイと咽んで泣く。やがて夫の光国が来合わせて助けるというのが、明晩、

とあったが、翌晩もそのままで、次第に姫松の声が渇れる。

「我が夫いのう、光国どの、助けて給べ。」とばかりで、この武者修業の、足の遅さ。

三晩目に、漸とこさと山の麓へ着いたばかり。

織次は、小児心にも朝から気になって、蚊帳の中でも髣髴と蚊燻しの煙が来るから、続けてその翌晩も聞きに行って、汚い弟子が古浴衣の膝切な奴を、胸の処でだらりとした拳固の矢蔵、片手をぬい、と出し、人の顋をしゃくうような手つきで、銭を強請る、爪の黒い掌へ持っていただけの小遣を載せると、目を※ったが、黄色い歯でニヤリとして、身体を撫でようとしたので、衝と極が悪く退った頸へ、大粒な雨がポツリと来た。

忽ち大驟雨となったので、蒼くなって駈出して帰ったが、家までは七、八町、その、びしょ濡れさ加減思うべしで。

あと二夜ばかりは、空模様を見て親たちが出さなかった。

さて晴れれば晴れるものかな。磨出した良い月夜に、駒の手綱を切放されたように飛出して行った時は、もうデロレンの高座は、消えたか、と跡もなく、後幕一重引いた、あたりの土塀の破目へ、白々と月が射した。

茫となって、辻に立って、前夜の雨を怨めしく、空を仰ぐ、と皎々として澄渡って、銀河一帯、近い山の端から玉の橋を町家の屋根へ投げ懸ける。その上へ、真白な形で、瑠璃色の透くのに薄い黄金の輪郭した、さげ結びの帯の見える、うしろ向きで、雲のような女の姿が、すっと立って、するすると月の前を歩行いて消えた。……

織次は、かつ思いかつ歩行いて、丁どその辻へ来た。

四

湯屋は郵便局の方へ背後になった。

辻の、この辺で、月の中空に雲を渡る婦の幻を見たと思う、屋根の上から、城の大手の森をかけて、一面にどんよりと曇った中に、一筋真白な雲の靡くのは、やがて銀河になる時節も近い。……視むれば、幼い時のその光景を目前に見るようでもあるし、また夢らしくもあれば、前世が兎であった時、木賊の中から、ひょいと覗いた景色かも分らぬ。待て、希くは兎でありたい。二股坂の狸は恐れる。

いや、こうも、他愛のない事を考えるのも、思出すのも、小北の許へ行くにつけて、人は知らず、自分で気が咎める己が心を、我とさあらぬ方へ紛らそうとしたのであった。

さて、この辻から、以前織次の家のあった、某……町の方へ、大手筋を真直に折れて、一丁ばかり行った処に、小北の家がある。

両側に軒の並んだ町ながら、この小北の向側だけ、一軒づもりポカリと抜けた、一町内の用心水の水溜で、石畳みは強勢でも、緑晶色の大溝になっている。

向うの溝から鰌によろり、こちらの溝から鰌によろり、と饒舌るのは、けだしこの水溜からはじまった事であろう、と夏の夜店へ行帰りに、織次は独りでそう考えたもので。

同一早饒舌りの中に、茶釜雨合羽と言うのがある。トあたかもこの溝の左角が、合羽屋、は面白い。……まだこの時も、渋紙の暖簾が懸った。

折から人通りが二、三人――中の一人が、彼の前を行過ぎて、フ

ト見返って、またひょいひょいと尻軽に歩行出した時、織次は帽子の庇を下げたが、瞳を屹と、溝の前から、件の小北の店を透かした。

此処にまた立留って、少時猶予っていたのである。

木格子の中に硝子戸を入れた店の、仕事の道具は見透いたが、弟子の前垂も見えず、主人の平吉が半纏も見えぬ。

羽織の袖口両方が、胸にぐいと上るように両腕を組むと、身体に勢を入れて、つかつかと足を運んだ。

軒から直ぐに土間へ入って、横向きに店の戸を開けながら、

「御免なさいよ。」

「はいはい。」

と軽い返事で、身軽にちょこちょこと茶の間から出た婦は、下膨れの色白で、真中から鬢を分けた濃い毛の束ね髪、些と煤びたが、人形だちの古風な顔。満更の容色ではないが、紺の筒袖の上被衣を、浅葱の紐で胸高にちょっと留めた甲斐甲斐しい女房ぶり。些と気になるのは、この家あたりの暮向きでは、これがつい通りの風俗で、誰も怪しみはしないけれども、畳の上を尻端折、前垂で膝を隠したばかりで、湯具をそのままの足を、茶の間と店の敷居で留めて、立ち身のなりで口早なものの言いよう。

「何処からおいで遊ばしたえ、何んの御用で。」

と一向気のない、空で覚えたような口上。言つきは慇懃ながら、取附き端のない会釈をする。

「私だ、立田だよ、しばらく。」

もう忘れたか、覚えがあろう、と顔を向ける、と黒目がちでも勢のない、塗ったような瞳を流して、凝と見たが、

「あれ。」と言いさま、ぐったりと膝を支いた。胸を衝と反らしながら、驚いた風をして、

「どうして貴下。」

とひょいと立つと、端折った太脛の包ましい見得ものう、ト身を返して、背後を見せて、つかつかと摺足して、奥の方へ駈込みながら、

「もしえ！　もしえ！　ちょっと……立田様の織さんが。」

「何、立田さんの。」

「織さんですがね。」

「や、それは。」

という平吉の声が台所で。がたがた、土間を踏む下駄の音。

五

「さあ、お上り遊ばして、まあ、どうして貴下。」

とまた店口へ取って返して、女房は立迎える。

「じゃ、御免なさい。」

「どうぞこちらへ。」と、大きな声を出して、満面の笑顔を見せた平吉は、茶の室を越した見通しの奥へ、台所から駈込んで、幅の広い前垂で、濡れた手をぐいと拭きつつ、

「ずっと、ずっとずっとこちらへ。」ともう真中へ座蒲団を持出して、床の間の方へ直しながら、一ツくるりと立身で廻る。

「構っちゃ可厭だよ。」と衝と茶の間を抜ける時、襖二間の上を渡って、二階の階子段が緩く架る、拭込んだ大戸棚の前で、入ちがいになって、女房は店の方へ、ばたばたと後退りに退った。

その茶の室の長火鉢を挟んで、差むかいに年寄りが二人いた。あ

あ、まだ達者だと見える。火鉢の向うに踞って、その法然天窓が、火の気の少い灰の上に冷たそうで、鉄瓶より低い処にしなびたのは、もう七十の上になろう。この女房の母親で、年紀の相違が五十の上、余り間があり過ぎるようだけれども、これは女房が大勢の娘の中に一番末子である所為で、それ、黒のけんちゅうの羽織を着て、小さな髷に鼈甲の耳こじりをちょこんと極めて、手首に輪数珠を掛けた五十格好の婆が背後向に坐ったのが、その総領の娘である。

不沙汰見舞に来ていたろう。この婆は、よそへ嫁附いて今は産んだ悴にかかっているはず。悴というのも、煙管、簪、同じ事を業とする。

が、この婆娘は虫が好かぬ。何為か、その上、幼い記憶に怨恨があるような心持が、一目見ると直ぐにむらむらと起ったから——この時黄色い、でっぷりした眉のない顔を上げて、じろりと額で見上げたのを、織次は屹と唯一目。で、知らぬ顔して奥へ通った。

「南無阿弥陀仏。」

と折から唸るように老人が唱えると、婆娘は押冠せて、

「南無阿弥陀仏。」と生若い声を出す。

「さて、どうも、お珍しいとも、何んとも早や。」と、平吉は坐りも遣らず、中腰でそわそわ。

「お忙しいかね。」と織次は構わず、更紗の座蒲団を引寄せた。

「ははは、勝手に道楽で忙しいんでしてな、つい暇でもございますしね、怠け仕事に板前で庖丁の腕前を見せていた所でしてねえ。ええ、織さん、この二、三日は浜で鰯がとれますよ。」と縁へはみ出るくらい端近に坐ると一緒に、其処にあった塵を拾って、卜首を捻って、土間に棄てた、その手をぐいと掴んで、指を揉み、

「何時、当地へ。」

「二、三日前さ。」

「雑と十四、五年になりますな。」

「早いものだね。」

「早いにも、織さん、私なんざもう御覧の通り爺になりましたよ。これじゃ途中で擦違ったぐらいでは、ちょっとお分りになりますまい。」

「否、些とも変らないね、相かわらず意気な人さ。」

「これはしたり！」

と天井抜けに、突出す腕で額を叩いて、

「はっ、恐入ったね。東京仕込のお世辞は強い。人、可加減に願いますぜ。」

と前垂を横に刎ねて、肱を突張り、ぴたりと膝に手を支いて向直る。

「何、串戯なものか。」と言う時、織次は巻莨を火鉢にさして俯向いて莞爾した。面色は凛としながら優しかった。

「粗末なお茶でございます、直ぐに、あの、入かえますけれど、お一ツ。」

と女房が、茶の室から、半身を摺らして出た。

「これえ、私が事を意気な男だとお言いなさるぜ、御馳走をしなけりゃ不可んね。」

「あれ、もし、お膝に。」と、うっかり平吉の言う事も聞落したらしかったのが、織次が膝に落ちた吸殻の灰を弾いて、はっとしたように瞼を染めた。

六

「さて、どうも更りましては、何んとも申訳のない御無沙汰で。否、もう、そりや実に、烏の鳴かぬ日はあっても、お噂をしない日はありませんが、なあ、これえ。」

「ええ。」と言った女房の顔色の寂しいので、烏ばかり鳴くのが分る。が、別に織次は噂をされようとも思わなかった。

平吉は畳み掛け、

「牛は牛づれとか言うんでえしょう。手前が何しますにつけて、これもまた、学校に縁遠い方だったものでえすから、暑さ寒さの御見舞だけと申すのが、書けないものには、飛んだどうも、実印を捺しますより、事も大層になります処から、何とも申訳がございやせん。

何しろ、まあ、御緩りなすって、いずれ今晩は手前どもへ御一泊下さいましょうで。」

と膝をすっと手先で撫でて、取澄ました風をしたのは、それに極った、という体を、仕方で見せたものである。

「串戯じゃない。」と余りその見透いた世辞の苦々しさに、織次は我知らず打棄るように言った。些とその言が激しかったか、

「え。」と、聞直すようにしたが、忽ち唇の薄笑。

「ははあ、御同伴の奥さんがお待兼ねで。」

「串戯じゃない。」

と今度は穏かに微笑んで、

「そんなものがあるものかね。」

「そんなものとは？」

「貴下、まだ奥様はお持ちなさりませんの。」

と女房、胸を前へ、手を畳にす。

織次は巻莨を、ぐいと、さし捨てて、

「持つもんですか。」

「織さん。」

と平吉は薄く刈揃えた頭を掉って、目を据えた。

「まだ、貴下、そんな事を言っていますね。持つものか！　なんて貴下、一生持たないでどうなさる。……また、こりやお亡くなんなすった父様に代って、一説法せにゃならん。例の晩酌の時と言うとはじまって、貴下が殊の外弱らせられたね。あれを一つ遣りやしょう。」

と片手で小膝をポンと敲き、

「飲みながらが可い、召飯りながら聴聞をなさい。これえ、何を、お銚子を早く。」

「唯、もう燗けてござりえす。」と女房が腰を浮かす、その裾端折で。

織次は、酔った勢で、とも思う事があったので、黙っていた。

「ぬたをの……今、私が擂鉢に拵えて置いた、あれを、鉢に入れて、小皿を二つ、可いか、手綺麗に装わないと食えぬ奴さね。……もう不断、本場で旨いものを食りつけてるから、田舎料理なんぞお口には合わん、何にも入らない、ああ、入らないとも。」

と独りで極めて、もじつく女房を台所へ追立てながら、

「織さん、鰯のぬただ、こりや御存じの通り、他国にはない味です。これえ、早くしなよ。」

ああ、しばらく。座にその鰯の臭気のない内、言わねばならぬ事

がある……

「あの、平さん。」

と織次は若々しいもの言いした。

「此家に何だね、僕ン許のを買ってもらった、錦絵があったっけね。」

「へい、錦絵。」と、さも年久しい昔を見るように、瞳を凝と上へあげる。

「内で困って、……今でも貧乏は同一だが。」

と織次は屹と腕を拱んだ。

「私が学校で要る教科書が買えなかったので、親仁が思切って、阿母の記念の錦絵を、古本屋に売ったのを、平さんが買戻して、蔵っといてくれた。その絵の事だよ。」

時雨の雲の暗い晩、寂しい水菜で夕餉が済む、と箸も下に置かぬ前から、織次はどうしても持たねばならない、と言って強請った、新撰物理書という四冊ものの黒表紙。これがなければ学校へ通われぬと言うのではない。科目は教師が黒板に書いて教授するのを、筆記帳へ書取って、事は足りたのであるが、皆が持ってるから欲しくてならぬ。定価がその時金八十銭と、覚えている。

七

親父はその晩、一合の酒も飲まないで、燈火の赤黒い、火屋の亀裂に紙を貼った、笠の煤けた洋燈の下に、膳を引いた跡を、直ぐ長火鉢の向うの細工場に立ちもせず、袖に継のあたった、黒のごろの半襟の破れた、千草色の半纏の片手を懐に、膝を立てて、それへ頬杖ついて、面長な思案顔を重そうに支えて黙然。

ちょっと取着端がないから、

「だって、欲しいんだもの。」と言い棄てに、ちょこちょこと板の間を伝って、だだッ広い、寒い台所へ行く、と向うの隅に、霜が見える……祖母さんが頭巾もなしの真白な小さなおばこで、皿小鉢を、がちがちと冷い音で洗ってござる。

「買っとくれよ、よう。」

と聞分けもなく織次がその袂にぶら下った。流は高い。走りもとの破れた芥箱の上下を、ちょろちょろと鼠が走って、豆洋燈が蜘蛛の巣の中に茫とある……

「よう、買っとくれよ、お弁当は梅干で可いからさ。」

祖母は、顔を見て、しばらく黙って、

「おお、どうにかして進ぜよう。」

と洗いさした茶碗をそのまま、前垂で手を拭き拭き、氷のような板の間を、店の畳へ引返して、火鉢の前へ、力なげに膝をついて、背後向きに、まだ俯向いたなりの親父を見向いて、

「の、そうさっしゃいよ。」

「なるほど。」

「他の事ではない、あの子も喜ぼう。」

「それでは、母親、御苦労でございます。」

「何んの、お前。」

と納戸へ入って、戸棚から持出した風呂敷包が、その錦絵で、国貞の画が二百余枚、虫干の時、雛祭、秋の長夜のおりおりごとに、馴染の姉様三千で、下谷の伊達者、深川の婀娜者が沢山いる。

祖母さんは下に置いて、

「一度見さっしゃるか。」と親父に言った。

「いや、見ますまい。」

と顔を背向ける。

祖母は解き掛けた結目を、そのまま結えて、ちょいと襟を引合わせた。細い半襟の半纏の袖の下に抱えて、店のはずれを板の間から、土間へ下りようとして、暗い処で、

「可哀やの、姉様たち。私が許を離れてもの、蜘蛛男に買われさっしゃるな、二股坂へ行くまいぞ。」

と小さな声して言聞かせた。織次は小児心にも、その絵を売って金子に代えるのである、と思った。……顔馴染の濃い紅、薄紫、雪の膚の姉様たちが、この暗夜を、すっと門を出る、……と偶と寂しくなった。が、紅、白粉が何んのその、で、新撰物理書の黒表紙が、四冊並んで、目の前で、ひょい、と躍った。

「待ってござい、織や。」

ごろごろと静かな枢戸の音。

台所を、どどんがたがた、鼠が荒野と駈廻る。

と祖母が軒先から引返して、番傘を持って出直す時、

「あのう、台所の燈を消しといてくらっしゃいよ、の。」

で、ガタリと門の戸がしまった。

コトコトと下駄の音して、何処まで行くぞ、時雨の脚が颯と通る。あわれ、祖母に導かれて、振袖が、詰袖が、褄を取ったの、裳を引いたの、鼈甲の櫛の照々する、銀の簪の揺々するのが、真白な脛も露わに、友染の花の幻めいて、雨具もなしに、びしゃびしゃと、跣足で田舎の、山近な町の暗夜を辿る風情が、雨戸の破目を朦朧として透いて見えた。

それも科学の権威である。物理書というのを力に、幼い眼を眩まして、その美しい姉様たちを、ぼったて、ぼったて、叩き出した、黒表紙のその状を、後に思えば鬼であろう。

台所の灯は、遙に奥山家の孤家の如くに点れている。

トその壁の上を窓から覗いて、風にも雨にも、ばさばさと髪を揺って、団扇の骨ばかりな顔を出す……隣の空地の棕櫚の樹が、その夜は妙に寂として気勢も聞えぬ。

鼠も寂莫と音を潜めた。……

八

台所と、この上框とを隔ての板戸に、地方の習慣で、蘆の簾の掛ったのが、破れる、断れる、その上、手の届かぬ何年かの煤がたまって、相馬内裏の古御所めく。

その蔭に、遠い灯のちらりとするのを背後にして、お納戸色の薄い衣で、ひたと板戸に身を寄せて、今出て行った祖母の背後影を、凝と見送る状にくんだ婦がある。

一目見て、幼い織次はこの現世にない姿を見ながら、驚きもせず、しかし、とぼんとして小さく立った。

その小児に振向けた、真白な気高い顔が、雪のように、颯と消える、とキリキリキリ――と台所を六角に井桁で仕切った、内井戸の轆轤が鳴った。が、すぐに、かたりと小皿が響いた。

流の処に、浅葱の手絡が、時ならず、雲から射す、濃い月影のようにちらちらして、黒髪のおくれ毛がはらはらとかかる、鼻筋のすっと通った横顔が仄見えて、白い拭布がひらりと動いた。

「織坊。」
と父が呼んだ。
「あい。」
ばたばたと駈出して、その時まで同じ処に、画に描いたように静として動かなかった草色の半纏に搦附く。
「ああ、阿母のような返事をする。肖然だ、今の声が。」
と膝へ抱く。胸に附着き、
「台所に母様が。」
「ええ！」と父親が膝を立てた。
「祖母さんの手伝いして。」
親父は、そのまま緊乎と抱いて、
「織坊、本を買って、何を習う。」
「ああ、物理書を皆読むとね、母様のいる処が分るって、先生がそう言ったよ。だから、早く欲しかったの、台所にいるんだもの、もう買わなくとも可い。……おいでよ、父上。」
と手を引張ると、猶予いながら、とぼとぼと畳に空足を踏んで、板の間へ出た。
その跫音より、鼠の駈ける音が激しく、棕櫚の骨がばさりと覗いて、其処に、手絡の影もない。
織次はわっと泣出した。
父は立ちながら背を擦って、わなわな震えた。
雨の音が颯と高い。
「おお、冷え、本降、本降。」
と高調子で門を入ったのが、此処に差向ったこの、平吉の平さんであった。
傘をがさりと掛けて、提灯をふっと消す、と蝋燭の匂が立って、家中仏壇の薫がした。
「呀！　世話場だね、どうなすった、父さん。お祖母は、何処へ。」
で、父が一伍一什を話すと――
「立替えましょう、可惜ものを。七貫や八貫で手離すには当りゃせん。本屋じゃ幾千に買うか知れないけれど、差当り、その物理書というのを求めなさる、ね、それだけ此処にあれば可い訳だ、と先ず言った訳だ。先方の買直がぎりぎりの処なら買戻すとする。……高く買っていたら破談にするだ、ね。何しろ、ここは一ツ、私に立替えさしてお置きなさい。……そらそら、はじめたはじめた、お株が出たぜえ。こんな事に済まぬも義理もあったものかね、ええ、君。」
と太く書生ぶって、
「だから、気が済まないなら、預け給え。僕に、ね、僕は構わん。構わないけれど、唯立替えさして気が済まない、と言うんなら、その金子の出来るまで、僕が預かって置けば可うがしょう。さ、それで極った。……一ツ莞爾としてくれ給え。君、しかし何んだね、これにつけても、小児に学問なんぞさせねえが可いじゃないかね。くだらない、もうこれ織公も十一、吹※ばたばたは勤まるだ。二銭三銭の足にはなる。ソレ直ぐに鹿尾菜の代が浮いて出ようというものさ。……実の処、僕が小指の姉なんぞも、此家へ一人二度目妻を世話しようといってますがね、お互にこの職人が小児に本を買って遣る苦労をするようじゃ、末を見込んで嫁入がないッさ。ね、祖母が、孫と君の世話をして、この寒空に水仕事だ。
因果な婆さんやないかい、と姉がいつでも言ってます。」……とその時言った。

――その姉と言うのが、次室の長火鉢の処に来ている。――

九

そこへ、祖母が帰って来たが、何んにも言わず、平吉に挨拶もせぬ先に、

「さあ」と言って、本を出す。

織次は飛んで獅子の座へ直った勢。上から新撰に飛付く、と突のめったようになって見た。黒表紙には綾があって、艶があって、真黒な胡蝶の天鵞絨の羽のように美しく……一枚開くと、きらきらと字が光って、細流のように動いて、何がなしに、言いようのない強い薫が芬として、目と口に浸込んで、中に描いた器械の図などは、ずッしり鉄の楯のように洋燈の前に顕れ出でて、絵の硝子が燐と光った。

さて、祖母の話では、古本屋は、あの錦絵を五十銭から直を付け出して、しまいに七十五銭よりは出せぬと言う。きなかもその上はつかぬと断る。欲い物理書は八十銭。何でも直ぐに買って帰って、孫が喜ぶ顔を見たさに、思案に余って、店端に腰を掛けて、時雨に白髪を濡らしていると、其処の亭主が、それでは婆さんこうしなよ。此処にそれ、はじめの一冊だけ、ちょっと表紙に竹箆の折返しの跡をつけた、古本の出物がある。定価から五銭引いて、丁どに鍔を合わせて置く。で、孫に持って行って遣るが可い、と捌きを付けた。国貞の画が雑と二百枚、辛うじてこの四冊の、しかも古本と代ったのである。

平吉はいきり出した。何んにも言うなで、一円出した。

「織坊、母様の記念だ。お祖母さんと一緒に行って、今度はお前が、背負って来い。」

「あい。」

とその四冊を持って立つと、

「路が悪い、途中で落して汚すとならぬ、一冊だけ持って来さっしゃい、また抱いて寝るのじゃの。」

と祖母も莞爾して、嫁の記念を取返す、二度目の外出はいそいそするのに、手を曳かれて、キチンと小口を揃えて置いた、あと三冊の兄弟を、父の膝許に残しながら、出しなに、台所を窺と覗くと、灯は棕櫚の葉風に自から消えたと覚しく……真の暗がりに、もう何んにも見えなかった。

雨は小止で。

織次は夜道をただ、夢中で本の香を嗅いで歩行いた。

古本屋は、今日この平吉の家に来る時通った、確か、あの湯屋から四、五軒手前にあったと思う。四辻へ行く時分に、祖母が破傘をすぼめると、蒼く光って、蓋を払ったように月が出る。山の形は骨ばかり白く澄んで、兎のような雲が走る。

織次は偶と幻に見た、夜店の頃の銀河の上の婦を思って、先刻とぼとぼと地獄へ追遣られた大勢の姉様は、まさに救われてその通り天にのぼる、と心が勇む。

一足先へ駈出して、見覚えた、古本屋の戸へ附着いたが、店も大戸も閉っていた。寒さは寒し、雨は降ったり、町は寂として何処にも灯の影は見えぬ。

「もう寝たかの。」

と祖母がせかせかござって、

「御許さい、御許さい。」

と遠慮らしく店頭の戸を敲く。

天窓の上でガッタリ音して、

「何んじゃ。」

と言う太い声。箱のような仕切戸から、眉の迫った、頬の膨れた、への字の口して、小鼻の筋から頤へかけて、べたりと薄髯の生えた、四角な顔を出したのは古本屋の亭主で。……この顔と、その時の口惜さを、織次は如何にしても忘れられぬ。

絵はもう人に売った、と言った。

見知越の仁ならば、知らせて欲い、何処へ行って頼みたい、と祖母が言うと、ちょいちょい見懸ける男だが、この土地のものではねえの。越後へ行く飛脚だによって、脚が疾い。今頃はもう二股を半分越したろう、と小窓に頬杖を支いて嘲笑った。

縁の早い、売口の美い別嬪の画であった。主が帰って間もない、店の燈許へ、あの縮緬着物を散らかして、扱帯も、襟も引さらげて見ている処へ、三度笠を横っちょで、てしま奠薩、脚絆穿、草鞋でさっさっと遣って来た、足の高い大男が通りすがりに、じろりと見て、いきなり価をつけて、ずばりと買って、濡らしちゃならぬと腰づけに、きりりと、上帯を結び添えて、雨の中をすたすたと行方知れずよ。……

「分ったか、お婆々。」と言った。

十

断念めかねて、祖母が何か二ツ三ツ口を利くと、挙句の果が、

「老耄婆め、帰れ。」

と言って、ゴトンと閉めた。

祖母が、ト目を擦った帰途。本を持った織次の手は、氷のように冷めたかった。そこで、小さな懐中へ小口を半分差込んで、圧えるように頤をつけて、悄然とすると、辻の浪花節が語った……

「姫松殿がエ。」

が暗から聞える。——織次は、飛脚に買去られたと言う大勢の姉様が、ぶらぶらと甘干の柿のように、樹の枝に吊下げられて、上げつ下ろしつ、二股坂で苛まれるのを、目のあたりに見るように思った。

とやっぱり芬とする懐中の物理書が、その途端に、松葉の燻る臭気がし出した。

固より口実、狐が化けた飛脚でのうて、今時町を通るものか。足許を見て買倒した、十倍百倍の儲が惜さに、貉が勝手なことを吐く。引受けたり平吉が。

で、この平さんが、古本屋の店へ居直って、そして買戻してくれた錦絵である。

が、その後、折を見て、父が在世の頃も、その話が出たし、織次も後に東京から音信をして、引取ろう、引取ろうと懸合うけれども、ちるの、びるので纏まらず、追っかけて追詰めれば、片音信になって埒が明かぬ。

今日こそ何んでも、という意気込みであった。

さて、その事を話し出すと、それ、案の定、天井睨みの上睡りで、ト先ず空惚けて、漸と気が付いた顔色で、

「はあ、あの江戸絵かね、十六、七年、やがて二昔、久しいもん

でさ、あったっけかな。」

と聞きも敢えず……

「ないはずはないじゃないか、あんなに頼んで置いたんだから。……」と何故かこの絵が、いわれある、活ける恋人の如く、容易くは我が手に入らない因縁のように、寝覚めにも懸念して、此家へ入るのに肩を聳やかしたほど、平吉がかかる態度に、織次は早や躁立ち焦る。

平吉は他処事のように仰向いて、

「なあ、これえ。」

と戸棚の前で、膳ごしらえする女房を頤で呼んで、

「知るまいな。忘れたろうよ、な、な、お前も、あの、江戸絵さ、蔵の中にあったっけか。」

「唯、ござりえす、出しますかえ。」と女房は判然言った。

「難有う、お琴さん。」

とはじめて親しげに名を言って、凝と振向くと、浪の浅葱の暖簾越に、また颯と顔を赧らめた処は、どうやら、あの錦絵の中の、その、どの一人かに俤が幽に似通う。……

「お一つ。」

とそこへ膳を直して銚子を取った。変れば変るもので、まだ、七八ツ九ツばかり、母が存生の頃の雛祭には、緋の毛氈を掛けた桃桜の壇の前に、小さな蒔絵の膳に並んで、この猪口ほどな塗椀で、一緒に蜆の汁を替えた時は、この娘が、練物のような顔のほかは、着くるんだ花の友染で、その時分から円い背を、些と背屈みに座る癖で、今もその通りなのが、こうまで変った。

平吉は既う五十の上、女房はまだ二十の上を、二ツか、多くて三ツであろう。この姉だった平吉の前の家内が死んだあとを、十四、五の、まだ鳥も宿らぬ花が、夜半の嵐に散らされた。はじめ孫とも見えたのが、やがて娘らしく、妹らしく、こうした処では肖しくなって、女房ぶりも哀に見える。

これも飛脚に攫われて、平吉の手に捕われた、一枚の絵であろう。いや、何んにつけても、早く、とまた屹と居直ると、女房の返事に、苦い顔して、横睨みをした平吉が、

「だが、何だぜ、これえ、何それ、何、あの貸したきりになってるはずだぜ。催促はするがね……それ、な、これえ。まだ、あのまま返って来ないよ、そうだよ。ああ、そうだよ。」

と幾度も一人で合点み、

「ええ、織さん、いや、どうも、あの江戸絵ですがな、近所合壁、親類中の評判で、平吉が許へ行ったら、大黒柱より江戸絵を見い、という騒ぎで、来るほどに、集るほどに、丁と片時も落着いていた験はがあせん。」

と蔵の中に、何とやらと言った、その口の下……

「手前じゃ、まあ、持物と言ったようなものの、言わばね、織さん、何んですわえ。それ、貴下から預かっているも同然な品なんだから、出入れには、自然、指垢、手擦、つい汚れがちにもなりやしようで、見せぬと言えば喧嘩になる……弱るの何んの。そこで先ず、貸したように、預けたように、余所の蔵に秘ってありますわ。ところが、それ。」

と、これも気色ばんだ女房の顔を、兀上った額越に、卜睨って、

「その蔵持の家には、手前が何でさ、……些とその銭式の不義理があって、当分顔の出せない、といったような訳で、いずれ、取って

来ます。取って来るには取って来ますが、ついちょっと、ソレ銭式の事ですからな。

それに、織さん、近頃じゃ価が出ましたっさ。錦絵は……唯た一枚が、雑とあの当時の二百枚だってね、大事のものです。貴下にも大事のもので、またこっちも大事のものでさ。価は惜まぬ、ね、価は惜まぬから手放さないか、と何度も言われますがね、売るものですか。そりゃ売らない。憚りながら平吉売らないね。預りものだ、手放して可いものですかい。

けれども、おいそれとは今言ったような工合ですから、いずれ、その何んでさ。ま、ま、めし飲れ、熱い処を。ね、御緩り。さあ、これえ、お焼物がない。ええ、間抜けな、ぬたばかり。これえ、御酒に尾頭は附物だわ。ぬたばかり、いやぬたぬたとぬたった婦だ。へへへへへ、鰯を焼きな、気は心よ、な、鰯をよ。」

と何か言いたそうに、膝で、もじもじして、平吉の額をぬすみ見る女房の様は、湯船へ横飛びにざぶんと入る、あの見世物の婦らしい。これも平吉に買われたために、姿まで変ったのであろう。

坐り直って、

「あなたえ。」

と怨めしそうな、情ない顔をする。

ぎょろりと目を剥き、険な面で、

「これえ。」と言った。

が、鰯の催促をしたようで。

「今、焼いとるんや。」

と隣室の茶の室で、女房の、その、上の姉が皺びた声。

「なんまいだ。」

と婆が唱える。……これが――「姫松殿がえ。」と耳を貫く。……称名の中から、じりじりと脂肪の煮える響がして、腥いのが、むらむらと来た。

この臭気が、偶と、あの黒表紙に肖然だと思った。

とそれならぬ、姉様が、山賊の手に松葉燻しの、乱るる、揺めく、黒髪までが目前にちらつく。

織次は激くいった。

「平吉、金子でつく話はつけよう。鰯は待て。」

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店
1987（昭和62）年9月16日第1刷発行
1999（平成11）年3月15日第19刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十二巻」岩波書店
1942（昭和17）年4月初版発行
初出：「太陽」
1910（明治10）年1月号
※底本の親本は総ルビ。底本作成時にルビが取捨選択されています。
入力：今中一時
校正：青木直子
1999年12月16日公開
2005年12月2日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

国貞えがく

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/